

第2節

高齢者の姿と取り巻く環境の現状と動向

1 高齢者の家族と世帯がどのように変化してきたか

(1) 高齢者のいる世帯は全体の4割、そのうち「単独」「夫婦のみ」で過半数

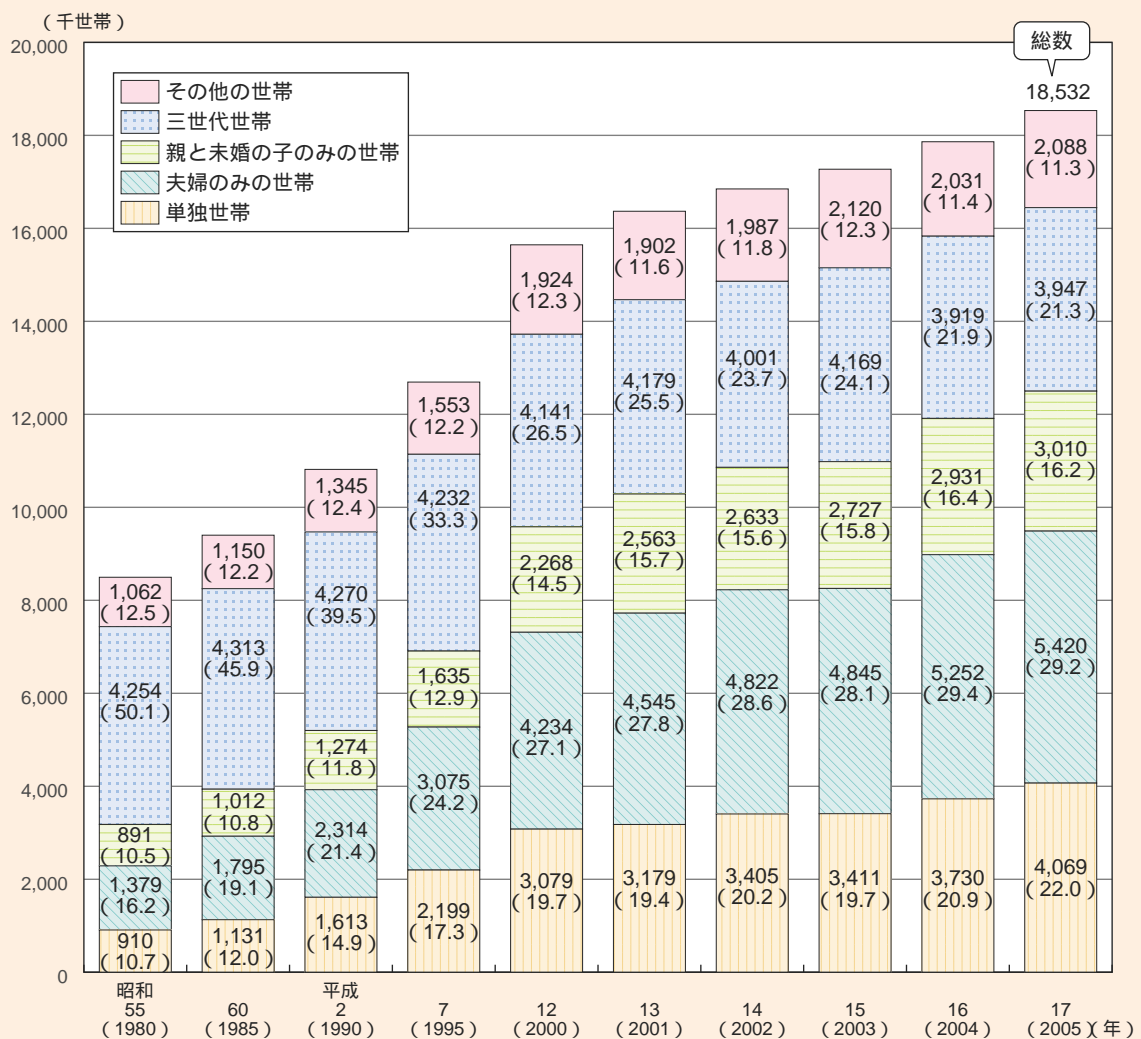
65歳以上の高齢者のいる世帯についてみると、平成17(2005)年現在、世帯数は1,853万世帯であり、全世帯(4,704万世帯)の39.4%を占めている。

世帯の内訳は、「単独世帯」が407万世帯(22.0%)、「夫婦のみの世帯」が542万世帯

(29.2%)、「親と未婚の子のみの世帯」が301万世帯(16.2%)、「三世帯世帯」が395万世帯(21.3%)となっている(図1-2-1)。

高齢者のいる世帯に占める単独世帯は、昭和55(1980)年に10.7%であったものが平成14(2002)年には20%を超え、その後も増加傾向が続いている。また、夫婦のみの世帯については、昭和55(1985)年に16.2%であったものが63(1988)年には20%を超え、その後も上昇を続けている。

図1-2-1 65歳以上の高齢者のいる世帯数及び構成割合(世帯構造別)



資料：昭和60年以前は厚生省「厚生行政基礎調査」、昭和61年以降は厚生労働省「国民生活基礎調査」

(注1) 平成7年の数値は、兵庫県を除いたものである。

(注2) ()内の数字は、65歳以上の者のいる世帯総数に占める割合(%)

一方、三世帯同居世帯の占める割合は、昭和55（1980）年には過半数を超えていたが、急速に低下し、近年では20％程度で推移している。

（2）子どもとの同居は減少しているが、子どもは依然として心の支え

65歳以上の高齢者について子どもとの同居率をみると、昭和55（1980）年にはほぼ7割であったものが、平成11（1999）年には50％を割り、17（2005）年には45.0％まで低下し、子どもとの同居の割合は大幅に低下した。一人暮らし又は夫婦のみの世帯については、ともに大幅に増加しており、昭和55（1980）年には合わせて3割弱であったものが、平成16（2004）年には過半数を超え、17（2005）年には合わせて51.6％まで上昇している（図1-2-2）。

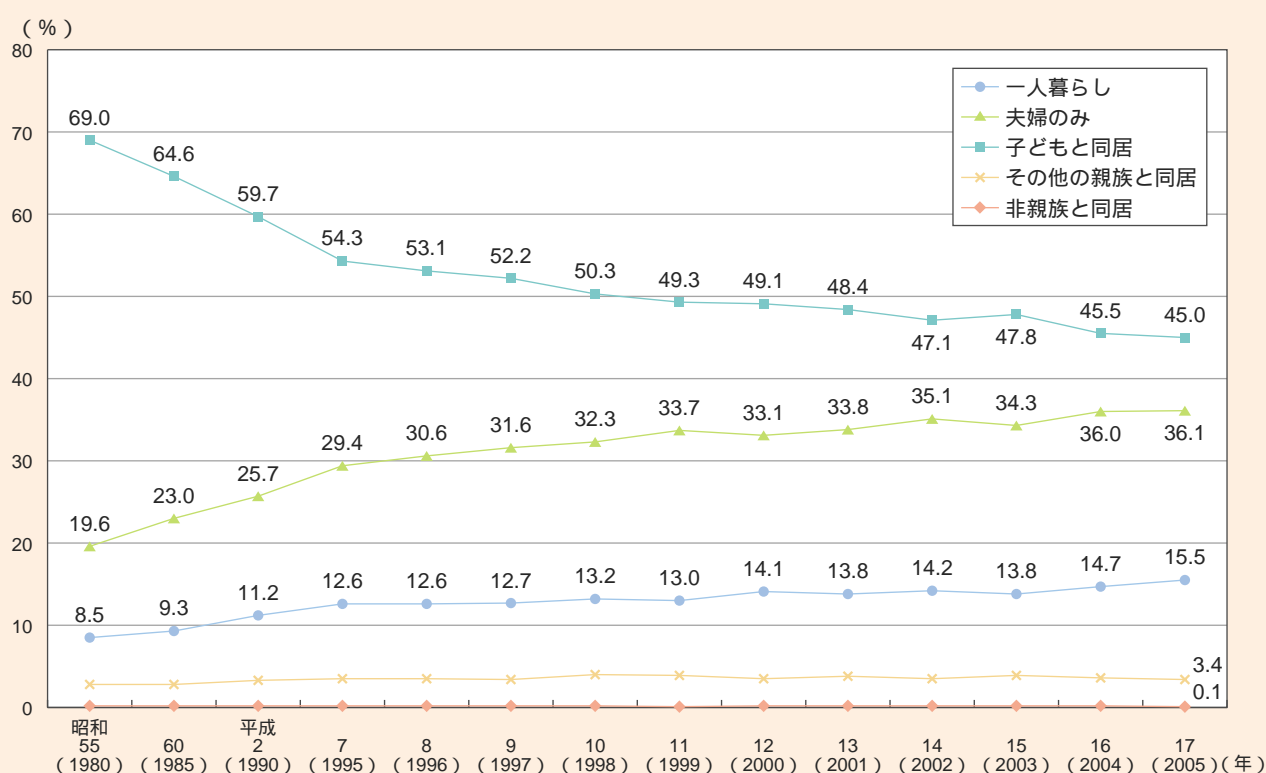
年齢別にみると、年齢が低いほど子どもとの

同居率は低くなっており、80歳以上では男性が48.3％、女性が63.4％なのに対し、65～69歳で男性が38.9％、女性で40.3％となっている（図1-2-3）。

60歳以上の高齢者について子どもとの同居に関する意識をみると、平成17（2005）年度において、「現在同居しており将来も同居」が31.2％、「現在別居しているが将来は同居」が9.9％と、合わせて41.1％が将来同居する意向を持っており、「現在別居しており、将来も別居のまま」は19.9％、「現在は同居しているが将来は別居する」が4.1％と、合わせて24.0％が将来別居する意向を持っている（図1-2-4）。

これを平成13（2001）年度における同調査と比較すると13年度調査では「将来同居」が46.7％であることから5.6ポイント減となっているのに対し、「将来別居」が17.8％と、6.2ポイン

図1-2-2 家族形態別にみた高齢者の割合



資料：昭和60年以前は厚生省「厚生行政基礎調査」、昭和61年以降は厚生労働省「国民生活基礎調査」

（注1）「一人暮らし」とは、上記調査における「単独世帯」のことを指す。

（注2）平成7年は兵庫県を除いたものである。

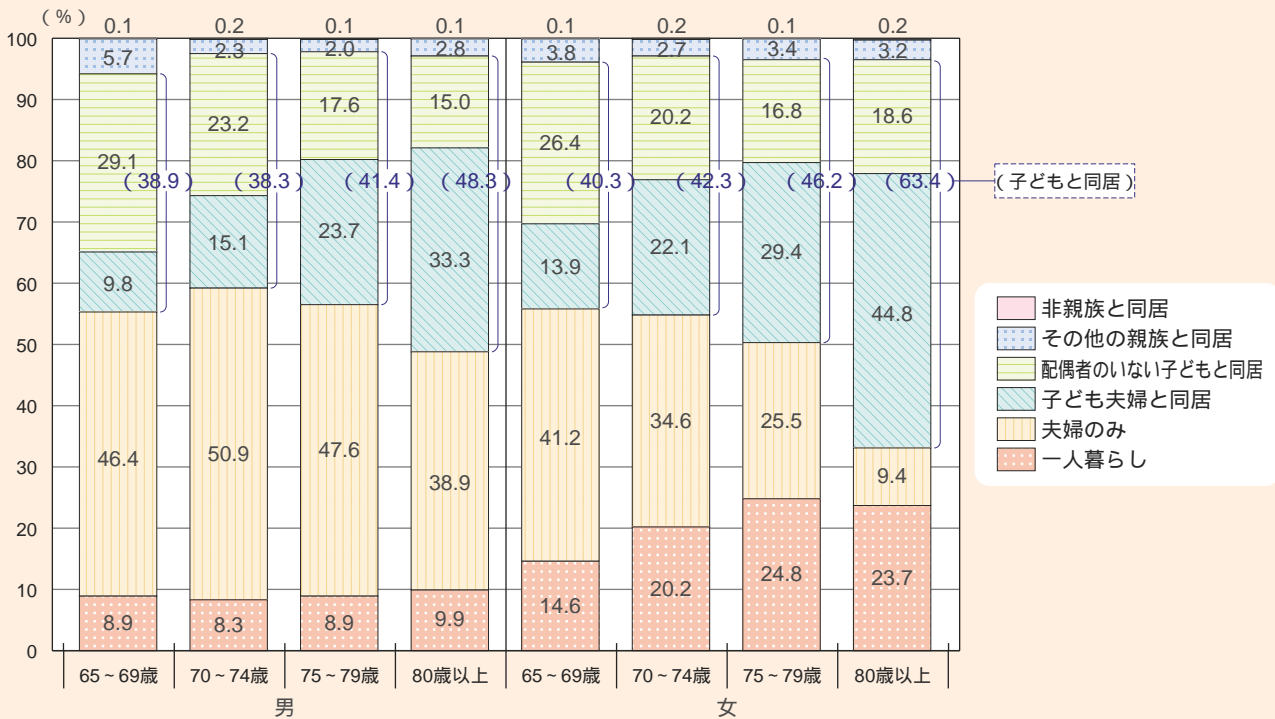
ト増となっており、子どもと別居する傾向が大きくなっている。

しかしながら、高齢者の心の支えとなっている人についてみると、平成17(2005)年度にお

いても、子どもを挙げる人が過半数を超えており、依然として高齢者にとって子どもが心の支えとなっている(図1-2-5)

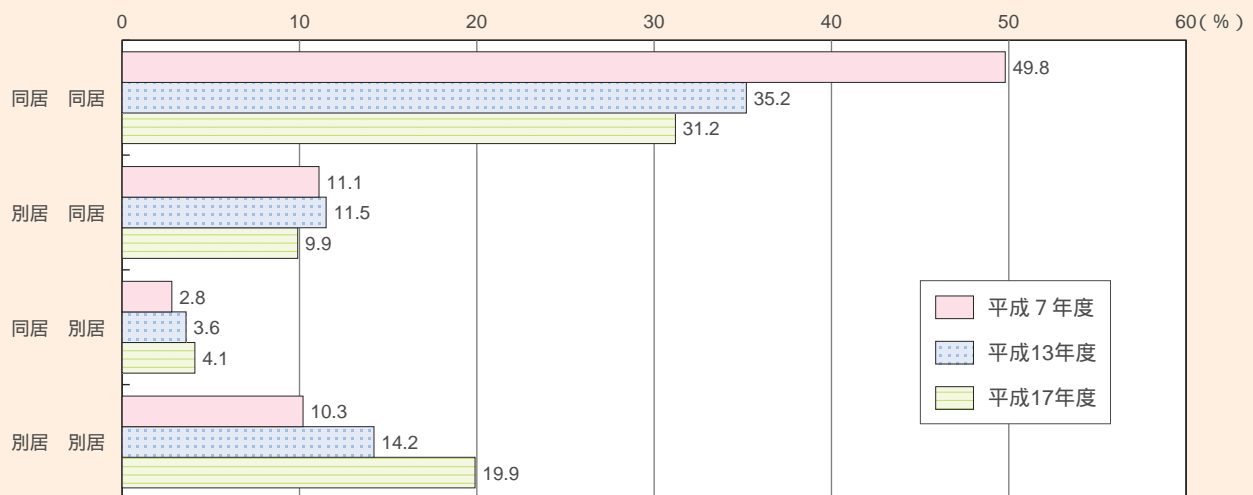
60歳以上の高齢者の別居している子との接触

図1-2-3 家族構成割合高齢者の男女・年齢階級別



資料: 厚生労働省「国民生活基礎調査」(平成17年)
 (注1) 「一人暮らし」とは、上記調査における「単独世帯」のことを指す
 (注2) () 内の数値は子どもと同居している者の割合(子ども夫婦と同居と配偶者のいない子どもと同居の合計)

図1-2-4 高齢者の子どもとの同居の意識

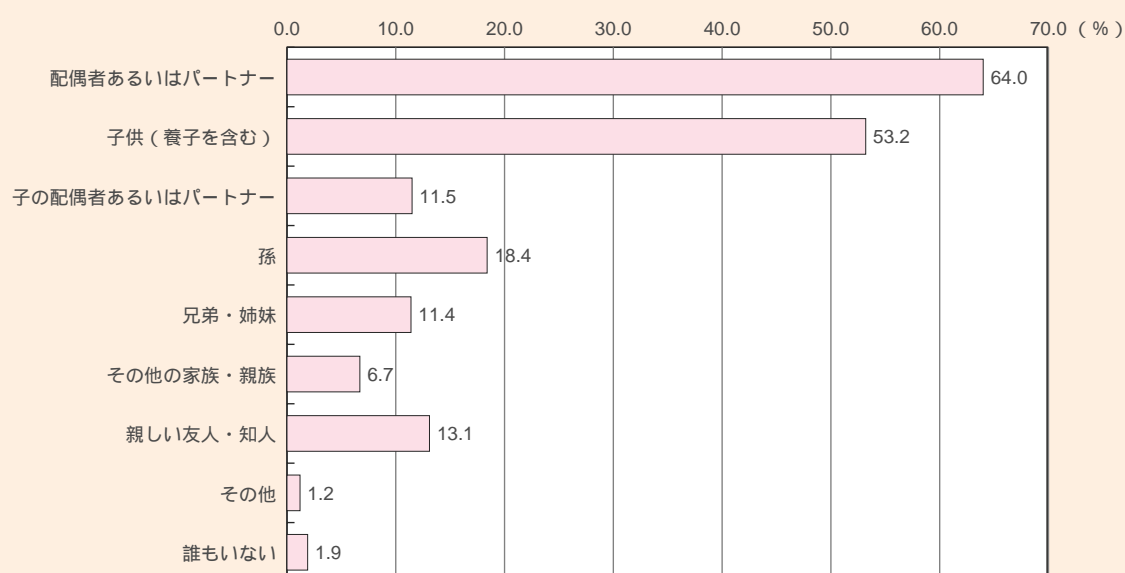


資料: 内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」
 (注) 全国の60歳以上の男女を対象とした調査結果

頻度についてみると、「週1回以上」(「ほとんど毎日」)、「週に1回以上」の割合の合計)が46.8% (男性44.7%、女性48.5%)であるのに対し、「月に1~2回以下」(「月に1~2回」)、「年に数回」)、「ほとんどない」の合計)は53.2% (男性55.3%、女性51.5%)と、前者の割合が低くなっている。諸外国との比較をみると、前者の割合が、アメリカで約8割、韓国、ドイツ、フランスでは6割~7割となっており、これらの国と比べると、我が国の高齢者は別居している子との接触頻度が低い者が多くなっている(表1-2-6)。

子どもや孫との付き合い方について、60歳以上の高齢者の意識をみると、平成17(2005)年度において、子どもや孫とは、「いつも一緒に生活できるのがよい」が34.8%、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が42.9%となっている。過去の調査と比較してみると、前者の割合が低下する一方で、後者の割合が上昇し、17(2005)年度には両者の割合が逆転した。また、子どもや孫と「いつも一緒に生活できるのがよい」は、7(1995)年度まで過半数を超えていたが17(2005)年度調査では34.8%まで減少し

図1-2-5 心の支えになっている人(複数回答)



資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成18年)
(注)調査対象は、全国60歳以上の男女

表1-2-6 別居している子との接触頻度

	(%)						
	ほとんど毎日	週に1回以上	月に1~2回	年に数回	ほとんどない	週1回以上	月1~2回以下
日本	16.7	30.1	34.9	15.7	2.6	46.8	53.2
(うち男)	12.9	31.8	35.1	16.5	3.6	44.7	55.3
(うち女)	19.8	28.7	34.7	15.1	1.7	48.5	51.5
韓国	23.2	43.7	25.4	6.2	1.6	66.9	33.2
アメリカ	41.2	39.6	12.5	5.0	1.7	80.8	19.2
ドイツ	24.8	33.8	18.2	19.6	3.7	58.6	41.5
フランス	28.0	39.2	18.6	11.9	2.3	67.2	32.8

資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成18年)
(注)子との接触とは、実際に会うこと、他、電話等による接触を含む。

たのに対し、「たまに会話する程度でよい」の割合は、12（2000）年度には6.6%であったものが17（2005）年度には2倍超の14.7%となっており、以前に比べると、より密度の薄い付き合い方でもよいと考える高齢者が増えていることがうかがえる（図1-2-7）。

（3）一人暮らし高齢者は増加傾向にあるも一人で過ごすことには不安を感じている

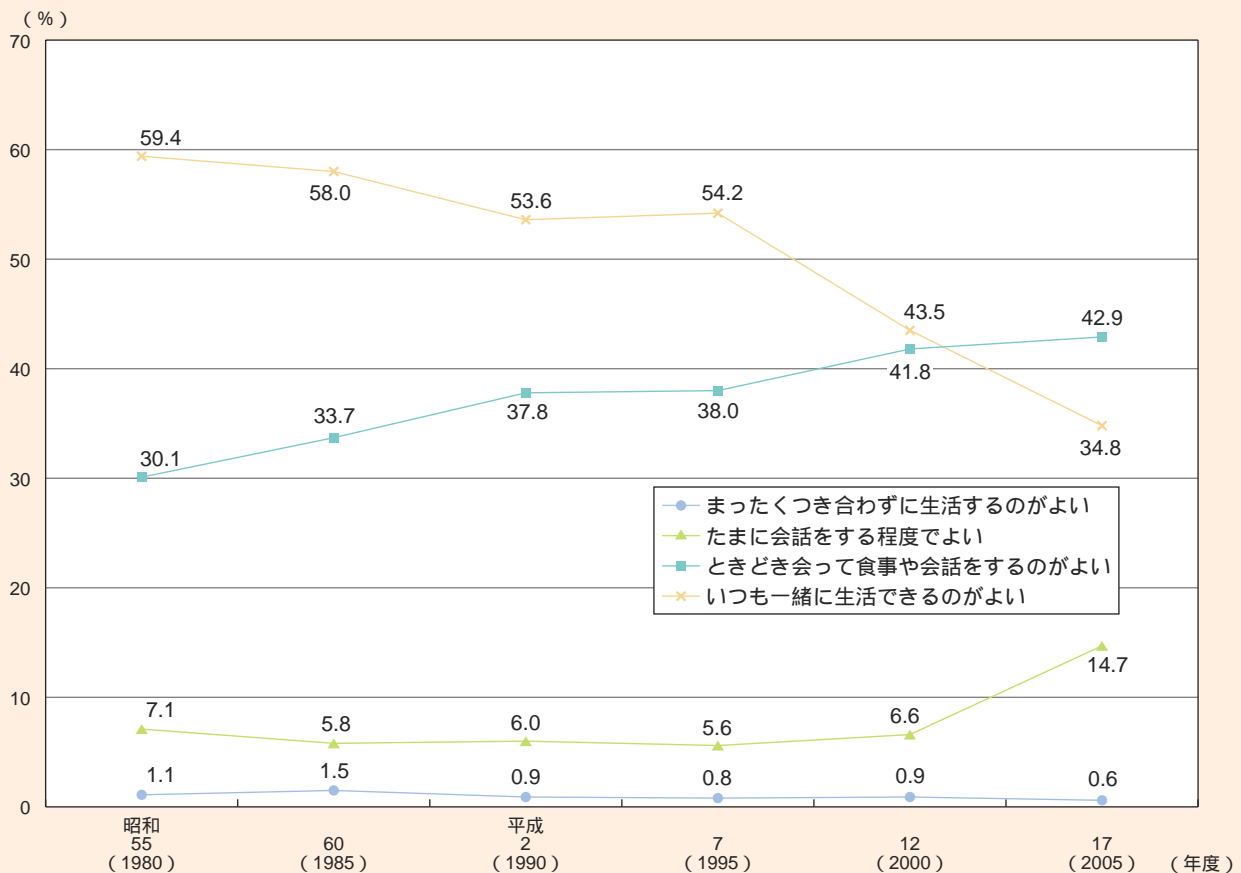
65歳以上の一人暮らし高齢者の増加は男女共に顕著であり、昭和55（1980）年には男性約19万人、女性約69万人、高齢者人口に占める割合は男性4.3%、女性11.2%であったが、平成17（2005）年には男性約105万人、女性約281万人、

高齢者人口に占める割合は男性9.7%、女性19.0%となっている。今後も一人暮らし高齢者は増加を続け、特に男性で一人暮らし高齢者の割合が大きく伸びることが見込まれている（図1-2-8）。

なお、一人暮らし高齢者の割合が増加する要因としては、未婚率や離婚率の上昇、配偶者との死別後でも子と同居しない者の増加などが挙げられる。

一方、一人暮らし高齢者については、平成17（2005）年度において、「日常生活に満足」とする割合が74.0%に上っているものの、「心配ごとがある」とする割合も63.0%と過半数を超えており、14（2002）年度調査の41.2%に比べて20

図1-2-7 高齢者の子どもや孫との付き合い方



資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」

（注1）全国60歳以上の男女を対象とした調査結果

（注2）平成12年度及び17年度調査には、「わからない」（12年度：7.0%、17年度：6.9%）がある。

ポイント以上増加している。また、「心配ごとがある」一人暮らし高齢者のうち、「頼れる人がいない」と回答した割合は30.7%と、14(2002)年度調査16.8%から大幅に増加しており、一般世帯4.7%の約6.5倍となっている。さらに、14(2002)年度調査と比較して、「心配ごとがある」割合は約1.5倍に、「頼れる人がいない」割合が約1.8倍に伸びている(図1-2-9)

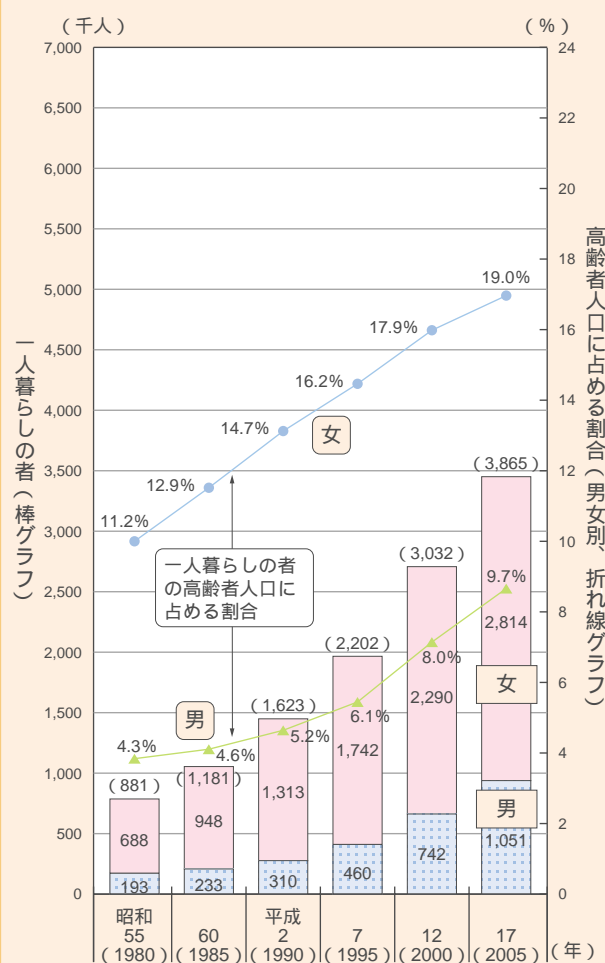
こうしたことから、一人で過ごすことへの不安を感じている高齢者の割合が増えていることがうかがえる。

また、平成17(2005)年度において、緊急時の連絡先として「娘」「息子」を挙げている人がそれぞれ4割強と「兄弟姉妹」「となり近所の人」「友人・知人」等に比べて圧倒的に多数を占めていることから、一人暮らしであっても、多くの高齢者が子どもとのつながりを望んでいることがわかる(図1-2-10)

(4) 配偶者の有無をみると、配偶者と死別した割合は女性が男性の4倍にのぼる

65歳以上の高齢者の配偶関係についてみると、平成17(2005)年における有配偶率は、男性81.8%に対し、女性は47.1%である。女性高齢者の約2人に1人が配偶者なしとなっているが、その割合は低下傾向にある。また、未婚率は、男性2.4%、女性3.5%、離別率は男性2.8%、女性3.9%と共に上昇傾向となっている(図1-2-11)

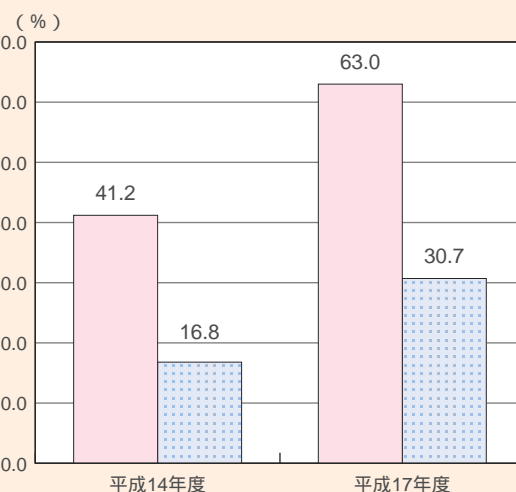
図1-2-8 一人暮らしの高齢者の動向



資料：総務省「国勢調査」
 (注1)「一人暮らし」とは、上記の調査・推計における「単独世帯」のことを指す。
 (注2)棒グラフ上の()内は65歳以上の一人暮らし高齢者の男女計

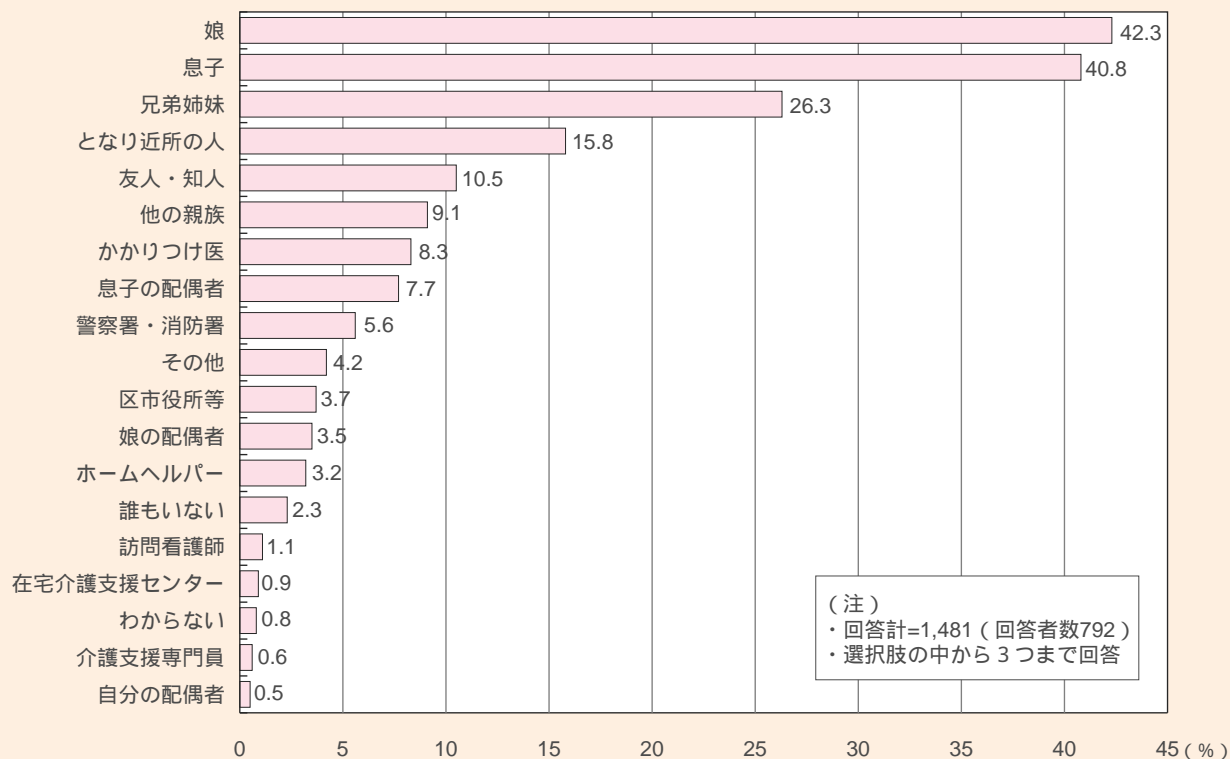
図1-2-9 日常生活における心配ごと及びその内容について

心配ごとがある
 心配ごとがある一人暮らし高齢者のうち、頼れる人がいない(複数回答)



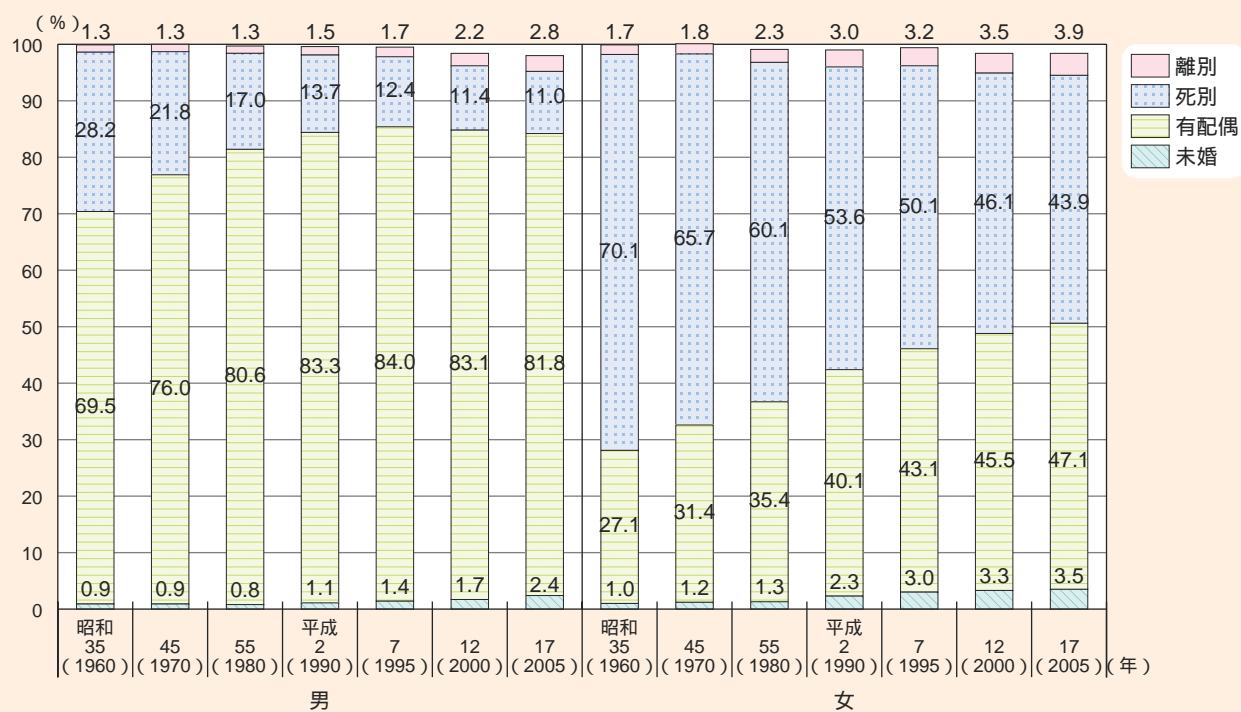
資料：内閣府「一人暮らし高齢者に対する意識調査」(平成15年)
 「世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査」(平成18年)

図1 - 2 - 10 一人暮らし高齢者の緊急時の連絡先



資料：内閣府「世帯類型に応じた高齢者の生活実態等に関する意識調査」(平成18年)

図1 - 2 - 11 配偶関係別に見た高齢者の割合



資料：総務省「国勢調査」
 (注)「配偶関係不詳」は省略した。

コラム

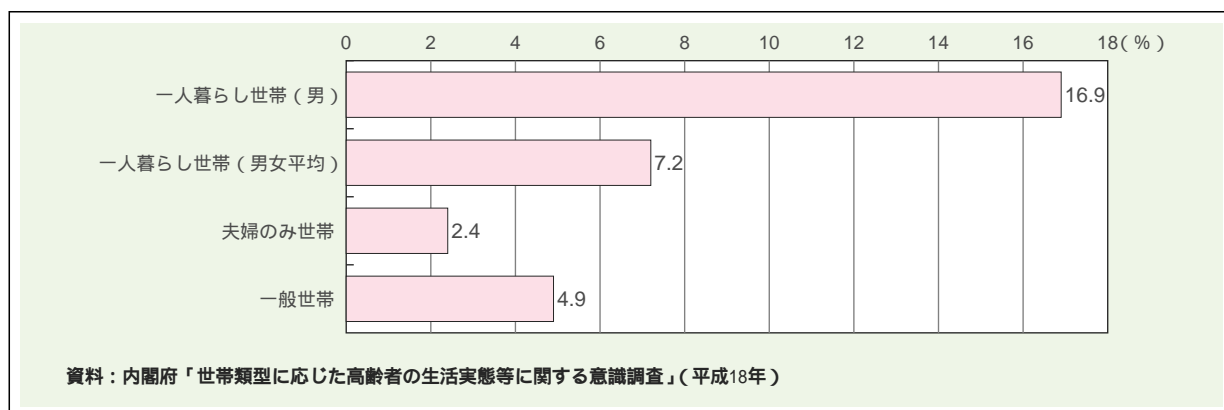


一人暮らしの男は寂しい？

一人暮らし世帯で日常生活での心配があるとする割合は63.0%と6割を超えているが、夫婦のみ世帯でも61.9%に、一般世帯でも58.4%に上っており、大きな差はない。心配ごとの内容を見てみると「自分が病気又は介護を必要」がいずれの世帯でも最も高いが、2番目に高い項目は、一人暮らし世帯では「頼れる人がいなく一人きりである」が30.7%、夫婦のみ世帯では「配偶者が病気がちであったり介護を必要としている」が23.3%、一般世帯では「子どもや孫のこと」が22.6%と世帯ごとに特徴が現れている。

「心配ごとや悩みごとの話し相手・相談相手」についてみると、「相談したりする人はいない」割合は、夫婦のみ世帯（2.4%）、一般世帯（4.9%）に比べて一人暮らし世帯（7.2%）でやや高く、特に、一人暮らし世帯の男性で（16.9%）と男女平均の2倍強となっている。一人暮らし世帯の男性については、このほかにも、「近所づきあいが無い」（24.3%）「グループ活動に参加していない」（47.6%）等の項目で一人暮らし世帯の男女平均よりかなり高くなっており、一人暮らし世帯男性の孤立化が顕著となっている。

<コラム・心配ごとや悩みごとの相談相手や話し相手（相談相手がいらない割合）>



<コラム・近所づきあい>

